



田空だより

# なすの大地

第5号

2005年3月号(通巻第5号)  
那須野が原西部田園空間博物館運営協議会  
企画広報部会 編集・発行

## 那須野が原ウォークを開催

昨年の10月2日、田園空間博物館のサテライトと、那須疏水などの那須野が原全体を潤す水利施設をめぐる「那須野が原ウォーク」を水土里ネット那須野ヶ原(那須野ヶ原土地改良区連合)と共催で行いました。

当日は晴天に恵まれ、西那須野・塩原の方たちをはじめ、宇都宮や高根沢など那須野が原地区以外の方も参加され、その数は100名以上にのぼりました。

9時に那須野が原公園をバスで出発し、西岩崎にある那須疏水の頭首工(取り入れ口)や分水工、サイフォン出口などの施設を見学し、その後「松方別邸」「那須疏水探訪の小径」など田園空間博物館のサテライトをめぐるしました。

ちなみに、疏水のサイフォン出口は土地改良区の施設ですが、田園空間博物館のサテライトにもなっています。

(詳しくは次のページで)



開会にあたって挨拶を行う  
安田田園空間博物館運営協議会会長



那須塩原市(旧黒磯市)西岩崎の  
「那須疏水公園」

※すぐ目の前に頭首工があります。

那須塩原市(旧塩原町)横林の  
「那須疏水蛇尾川サイフォン出口」前



## サテライト紹介 (第5号)

### 那須疏水蛇尾川サイフォン出口 (横林)

那須疏水は、途中で蛇尾川の下を横断していますが、その部分は「サイフォンの原理」を応用した造りになっています。「サイフォン」は、大気圧を利用して、水を高いところから低いところに移すときに使われる仕組みです。(図1)



全景 (左側が現サイフォン出口で  
右側奥が旧サイフォン出口)

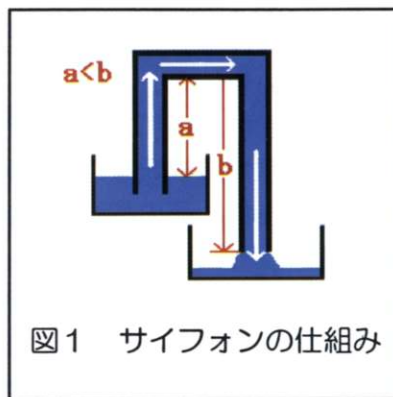


図1 サイフォンの仕組み

サイフォンとは、図1を見て分かる通り、水を一旦高いところへ送って、それから低いところに流すもので、「このサイフォンは形が違うのでは」と感じた方は大勢いるかと思えます。

ここで利用されているのは、「逆サイフォン」と呼ばれるもので、仕組みは上で述べているサイフォンとは少し違いますが、その形状がサイフォンを逆にしたようなものであることから、そのように呼ばれています。(図2)



現在のサイフォン出口

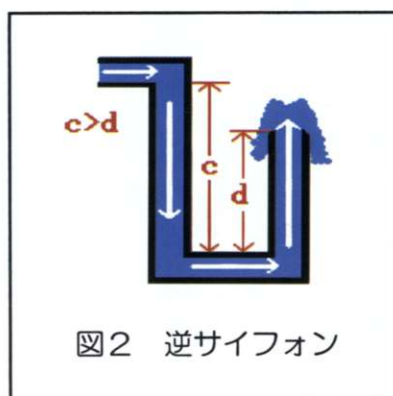


図2 逆サイフォン



旧サイフォン出口

### (注)

ここでは、明治につくられた旧サイフォン出口と昭和につくられた現サイフォン出口の両方を見ることができますが、現サイフォン出口の近くは危険ですので、見学の際はあまり近づかずにデッキの上かフェンスの外からご覧ください。

# 大地に夢を追う

～那須野が原と松方正義～

前号に掲載した記事の続きです。

## 《松方は事業の参画を断る》

松方は地元の印南・矢板の二人から「那須野が原の開墾事業に参画してくれないか」と強く要請されたようだが、これを断っている。その理由は、「政府の農務当局（勸農局長）として専ら民政にあたる身である。世間に誤解を招くようなことはできない。事業に参画するよりも、政府当局者として事業の奨励保護に全力であたり国家国益のために尽くしたい。」ということであった。そして、この立場と信念は明治26年、松方が那須開墾社を取得するまで取り続けている。そこで松方は自分に代わる誰かをと考え、同郷の士に那須の開墾を託したのではないかという推測もできる。

## 《水問題 ～灌漑用水どころか飲用水にも事欠く～》

開墾は明治13年に始まったが、灌漑用水どころか飲用水にも事欠く状態だったようである。そこで地元では飲用水路を作ろうと政府に頼むことになる。その上申書を出すあて先は内務省。この時松方は内務卿で、明治13年に上申書が出され、12月に要求が全額認められる。翌14年9月に着工12月一部開通したが資金難で一時中断していた。明治15年7月、資金が国から支出されて工事再開、11月に本幹水路ができる。開削費の増金願いは農商務卿あてで、これが西郷従道であった。政府に殖産のための起業基金が用意されており、これからの支出だったようだが、これを管理していたのが松方であった。国側の対応が迅速で比較的円滑に行われたのは、那須の事情に通じている松方がいたからだといわれている。

## 《飲用水路→運河構想→疏水》

ところが、飲用水路だけでは不十分であった。地元ではこの頃になっても運河構想の実現にあくまでもこだわっている。明治15～17年頃の記録を見ると、印南・矢板の二人は情熱と信念をもってこの運河構想の実現を目指して奔走している。交通の不便な時代に何度も東京に出ては、請願・陳情を繰り返しているが、それは涙ぐましいほどである。最終的には明治18年に国費10万円の予算が決定されて、疏水工事に至るわけである。もちろん、印南・矢板の二人の努力が大きかったわけだが那須に農場を持つ三島・大山・西郷などの政府高官の力、さらには大蔵卿時代の松方の尽力も少なくなかったようである。

## 《運河構想から那須疏水へ》

再三にわたる地元の請願は、運河構想実現のためだったのに対し、政府の方は当初から運河の開削は念頭になかったようで、専ら灌漑用水としての対応をしている。明治16年に行われた南一郎平の測量調査も灌漑用水の掘削のために行われた。最終的に疏水工事の予算化がなされた時、印南・矢板もこれに大喜びし、さすがの二人もこの時点で運河構想はあきらめたようである。那須疏水が完工するのは、明治18年9月であった。

## 《明治25年松方は下野》

松方は明治24年5月から内閣総理大臣兼大蔵大臣に就任するが、翌明治25年夏に総辞職し下野した。この機に、延び延びになっていた戊辰戦争で戦死した兄、正之進の墓参のため新潟まで赴いている。その帰途に那須を通り、那須開墾社を訪ねた。そこで、「疏水以北の土地がまだ売れない」との窮状を訴えられ、再び土地の買収を強く懇請される。松方は地味（地質）が悪いことはわかっている

たが、断ることもできず、同道の三男幸次郎と改めて土地を踏査し、経営の可能性について検討することになった。これまでと違い、公職を退いているので買収に気持ちが動いたようで、那須開墾社の全社員が松方の買収に同意するという条件が整えば、買収に応じようということになった。

#### 《翌26年那須開墾社は》

翌明治26年、那須開墾社は全社員一致で疏水以北の共有地1,100町歩（約1,100ヘクタール）を松方へ譲渡することを決定した。明治21年株主だった長男の巖に分配された土地と併せて、千本松農場が設立された。公人だったことを気遣ってか、土地の名義は巖にしたようである。ちなみに、「千本松」の呼称は、松が多く茂っていたところから、松方がつけたといわれている。

#### 《土地取得の背景》

松方は勸業局長、授産局長などを歴任し、近代日本の黎明期の農政に携わってきた。さらに、フランス万博で1年近く滞仏した折、欧州の農業事情をつぶさに見聞している。このようなことから、日本の農業のあり方には強い関心を持っていたことは想像に難くない。欧米で行われている大農法の導入を提唱したなどはその一端であろう。

一方、那須の開拓にも当初から深く関わってきた。陳情を受け、その開墾を積極的に提言し勧めてきた。とりわけ開墾に必要な水問題や疏水の開削に関しては、政府として必要な予算措置に尽力し、側面から支援してきた。このような経緯から那須野が原の開墾の成果や動向には強い関心があったはずである。那須開墾社の窮状を見聞するにつけ、その破綻だけは何としても回避させたかったに違いない。さらに、那須の地元からは、開墾への参画や土地の買収を再三要請されたにもかかわらず、自分自身としては公職にあることを理由に断ってきた。

土地取得の背景には、今、自分は下野し公職から離れている。自分自身で那須に土地を持ち、自分がこれまで日本の農業に対し思ってきたこと、言ってきたこと、そして抱いてきた夢を実践しようと思ったのではないか。水利が悪い、地味が悪いなど不利な条件があったとしても、誰もやらないのだったら、実際に自分で可能性に挑戦し、やれることを実証してみようという気持ちに動いたのではないかと推測するのである。

#### 《農場は蓬萊殖産<sup>ほうらい</sup>の管理運営に》

松方は明治3年、35歳のとき日田から中央の政府に出て民部大丞になり、大田原藩の那須開墾の請願を受けている。これが那須との最初の出会いであった。それから大正13年に89歳で亡くなるまで実に50年以上も那須とは縁があったことになる。前半の20年ぐら이가政府の立場で、後半、明治26年に千本松農場を設立してからは、自分自身で直接那須開墾に関わったことになる。

松方の亡き後、長男の巖が農場を引き継ぐが、巖が大正11年まで頭取をしていた十五銀行が、昭和2年の金融恐慌で休業に追い込まれ、負債の穴埋めに役員全員が私財を投じた。巖はすでに頭取を退いていたが、その責任を感じ一番多く私財を出している。松方がつくった三田本邸をはじめ書画骨董に至るまで、当時の金額で500万円という額である。さらに、公爵という名譽ある地位も返上しており、その対応は極めていさぎよかったといわれている。千本松農場も例外ではなく、萬歳閣とその周辺の土地だけを除いて巖の手を離れ、蓬萊殖産株式会社の管理運営するところとなった。松方は30年以上もかけて築いてきた農場が死後数年も経たずに、こんな結末になるとは思いもかけなかったであろう。

（「大地に夢を追う」の詳細文は、那須野が原開拓史研究会機関紙第58号に掲載されます。）